

トピック C

スポーツボランティアの将来 -「する」「みる」「ささえる」の関わり-

立教大学 コミュニティ福祉学部
教授 松尾 哲 矢

2020年東京オリンピック・パラリンピックを成功に導き、スポーツ文化を開花させるためには、個人がスポーツを「する」だけでなく、「する」「みる」「ささえる」スポーツ活動を多角的にバランスよく楽しむスポーツライフの構築が不可欠である。そこで、「する」「みる」「ささえる」の側面から現在の10代がどのようなスポーツライフを構築しているのかについて分析し、その文化的定着が遅れている「ささえる」スポーツの推進に向けて今後の可能性と課題について検討した。

C-1 10代のする・みる・ささえるスポーツ活動状況

わが国の青少年のスポーツ活動を「する」「みる」「ささえる」の3つの観点でパターン化し、その実情に迫った。

図C-1に「する」「みる」「ささえる」の活動状況を示した。本稿における「する」とは過去1年間に1回以上何らかの運動・スポーツを実施した者、「みる」とは過去1年間にスタジアムや体育館などに行って直接スポーツを観戦した者、そして「ささえる」とは過去1年間にスポーツボランティアを実施した者を指す。

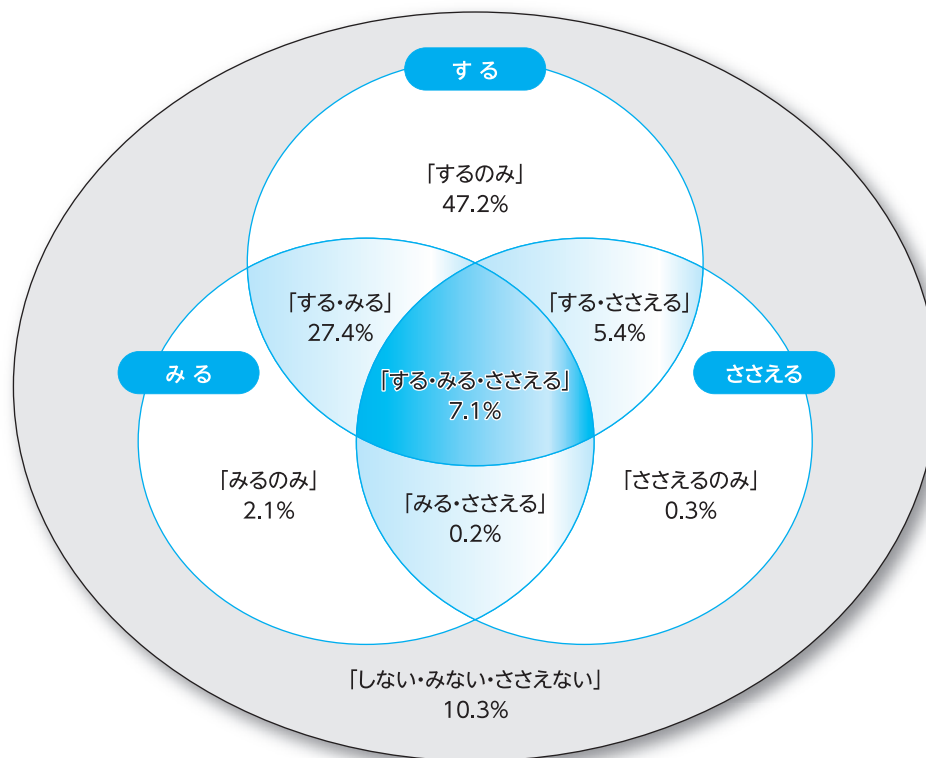
3活動ともに年に1回以上実施している「する・みる・ささえる」タイプは全体の7.1%であった。成人を対象としたSSF「スポーツライフ・データ2012」(2012)によると20歳以上の成人では12.7%となる。ここに位置づく者は、3活動をトータルに享受するスポーツライフを有しているタイプと理解できよう。次に、この3活動のうち2つを実施している者は、「する・みる」タイプ27.4%、「する・ささえる」タイプ5.4%、「みる・ささえる」タイプ0.2%であった。また、この3活動のうち1つのみを年1回以上実施している者は、「するのみ」タイプ47.2%、「みるのみ」タイプ2.1%、「ささえるのみ」タイプ0.3%という結果であった。3活動ともに実施していない「しない・みない・ささえ

ない」タイプは10.3%であった。

これらの結果から、スポーツをトータルに享受している「する・みる・ささえる」タイプは7.1%であり、10代人口から推計した場合、全国で約85万人となる(2012年3月31日現在の住民基本台帳による10代人口11,920,393人に基づく)。その一方で、スポーツに関わりをもたない「しない・みない・ささえない」タイプは10.3%であり、同様の推計によれば全国約123万人にのぼる。

全体の特徴をみると、「するのみ」タイプが47.2%と全体の約半数を占め、「する・みる」タイプが27.4%と約3割にのぼる。つまり、「する」か「する・みる」というスポーツ行動が全体の75%を占め、10代のスポーツライフはスポーツを「する」行動を中心に、それに「みる」行動が加わる形で特徴づけられているといえよう。

ここで「ささえる」という点に着目すると、「ささえるのみ」タイプは0.3%にすぎず、「する・みる・ささえる」タイプ7.1%、「する・ささえる」タイプ5.4%、「みる・ささえる」タイプ0.2%であり、スポーツを「ささえる」文化が定着していない様相がうかがえる。



【図C-1】 する・みる・ささえるの構造分析 (n=1,824)

注) 過去1年間に1回以上の運動・スポーツ実施、スポーツ観戦、スポーツボランティアの経験の有無により分類
資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

C-2 性別・年齢別にみた10代のする・みる・ささえるスポーツ活動状況

性別に「する」との関係に着目すると、「するのみ」タイプは男子46.1%、女子48.5%、「する・みる」タイプは男子32.2%、女子22.2%、「する・ささえる」タイプは男子5.8%、女子4.9%であり、男子で「する」と「みる」の親和性が高い。一方、「しない・みない・ささえない」タイプは男子6.9%、女子14.0%となり、女子で三無層が約7ポイント多くなっている。

年齢別では、10~12歳までは95%以上が年に1回以上の運動・スポーツを実施しているが、16~17歳では80%前半に、そして18~19歳では70%前半まで減少する。

そこで10代のスポーツ行動が「する」行動を中心に構成されている状況に鑑み、「する」と「みる」「ささえる」

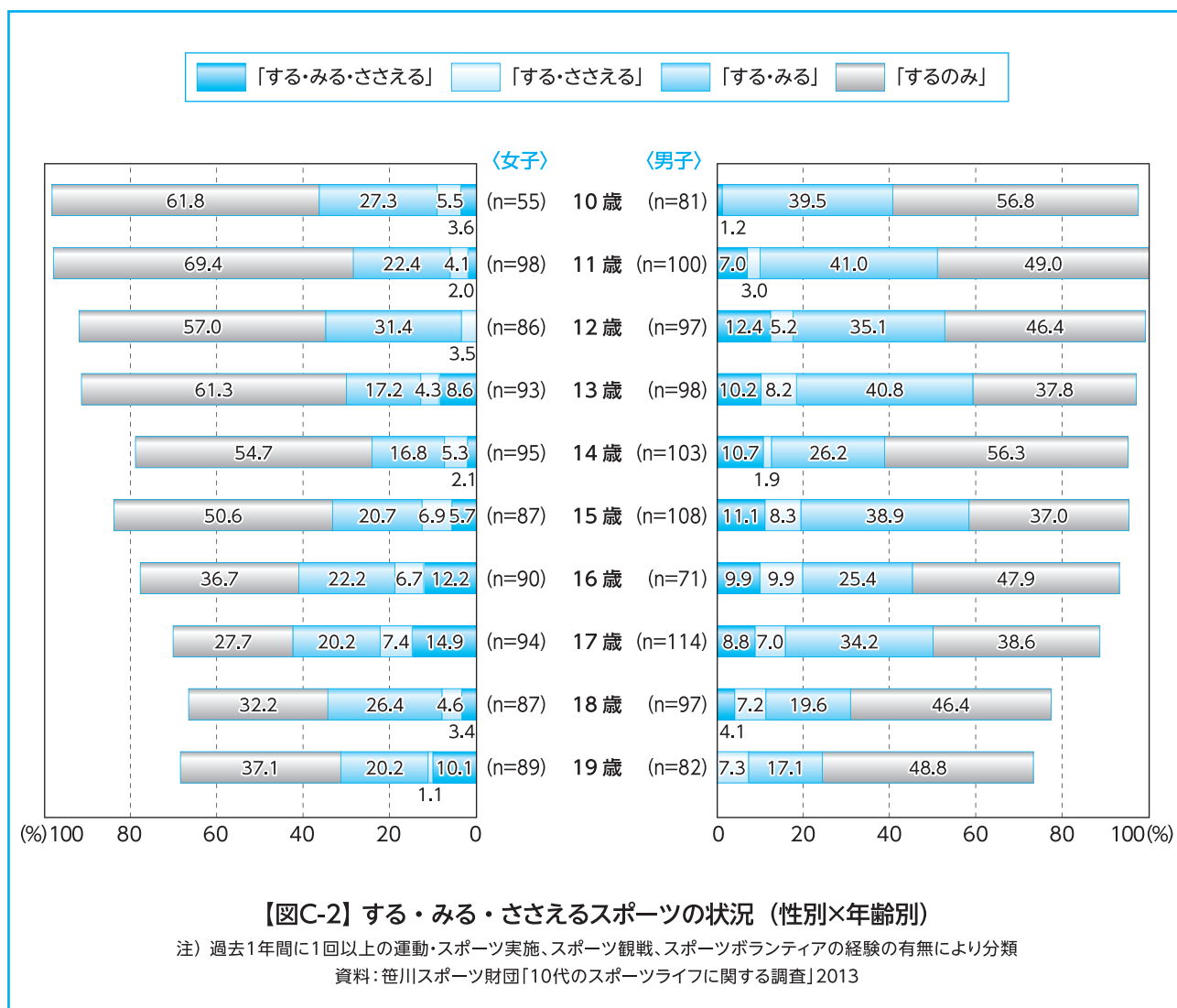
の関係から全体の状況を性・年齢別にみたものが図C-2である。

まず、「する」のみをみると10~13歳では男子は4~5割、女子では6割を占め、男子よりも女子の方が割合が高い。17歳以降になると女子では3~4割程度となるのに対し、男子では4~5割と、男女の割合の高さは逆転する。一方、「する・みる」タイプでは、13~15歳では女子に対して男子が10~20ポイント高い値を示すが、18~19歳では逆に女子が高くなっている。「する・みる・ささえる」タイプは、11~15歳において男子は7.0~12.4%、女子は0.0~8.6%の範囲であり、女子に比べて男子の割合の方が高い。しかし、16歳と17歳においては、女子では16

歳12.2%、17歳14.9%であるのに対し、男子では16歳9.9%、17歳8.8%となり、男子に比べて女子の割合が高くなる。

主に小学校期である11~12歳では、女子に比べて男子の方が「する」のみならず、「する・みる」「する・みる・ささえる」活動を実施する者の割合が高い。この傾向は13~15歳で顕著となり、主に中学校期の男子においては多様なスポーツへのアプローチができていく様相が看取される。しかし、主に高校期である16~18歳になると、「する」全体では男子の実施割合が高いものの、「する・みる」タイプ「する・みる・ささえる」タイプでは相対的に

女子の割合が高くなる結果は注目される。つまり、女子では年齢が上がるにつれて「する」全体の割合は低下するものの、「する・みる」、「する・みる・ささえる」活動を実施する者の割合が相対的に男子より高くなっており、スポーツへの多様なアプローチがみられる点は特徴的である。年齢が上がるにつれて女子の「する」スポーツ離れは顕著になる一方で、スポーツを実施している者の中では「みる」「ささえる」活動への広がりがみられるなど、スポーツライフの多様化がより顕著になっている状況がうかがえる。



C-3 スポーツ「しない・みない・ささえない」

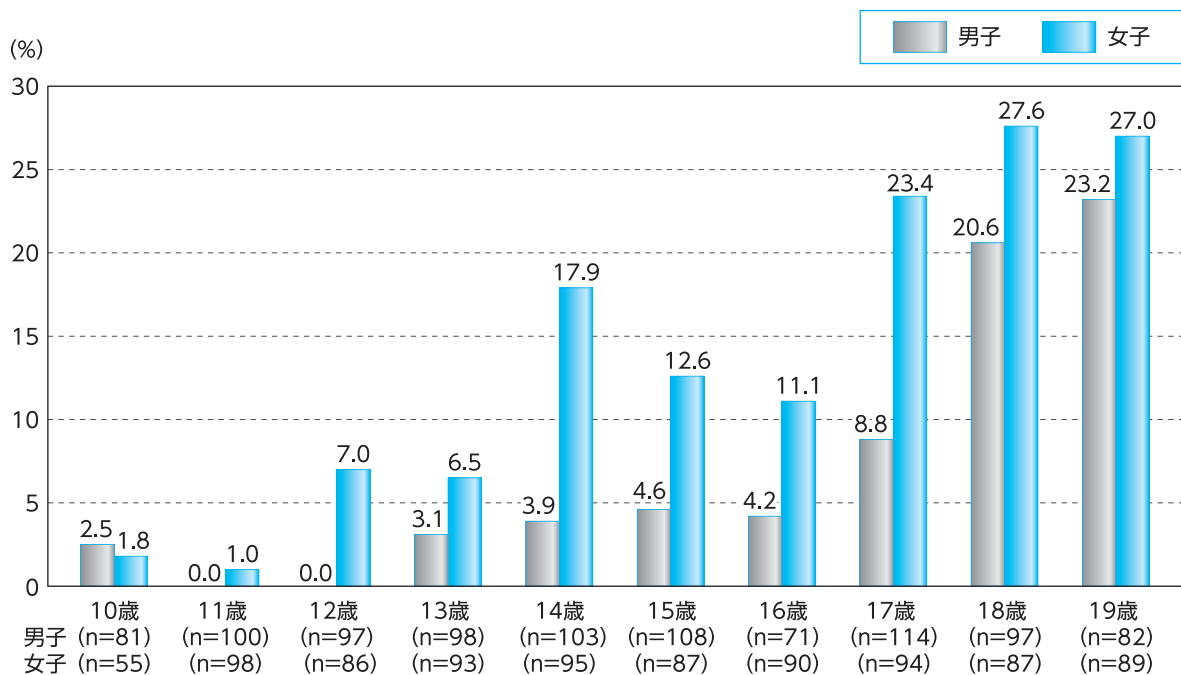
次に、スポーツ活動から完全に離れてしまっている「しない・みない・ささえない」タイプに着目し、性別・年齢別に比較したものが図C-3である。全体的にみると、年齢が上がるにしたがって「しない・みない・ささえない」が増加し、18～19歳では2～3割に達している点は見逃せない。

性別・年齢別にみると、10～11歳では男女間で差異はみられないが、12歳以降は男子に対して女子で「しない・みない・ささえない」の割合が高くなり、14歳では男子3.9%に対して、女子は17.9%となる。女子では17歳から、男子では18歳から2割を超える。

「しない・みない・ささえない」のスポーツに対する意向等をみると、「する」の促進要因となる運動不足感の有無は「しない・みない・ささえない」の82.9%が「とても感じる」(32.4%)、「少しは感じる」(50.5%)と回答している(表C-1)。また、運動・スポーツの好き嫌いをみると、「しない・みない・ささえない」では「好き」(8.0%)、「ど

ちらか」として好き」(32.6%)と回答した者の割合は40.6%と約4割にとどまり、約6割は「嫌い」「どちらか」として嫌い」と回答した。このように、「しない・みない・ささえない」の大半が運動・スポーツ実施の必要性を感じているものの、運動・スポーツが嫌いであるため、「する」を遠ざけていると推察される。

今後も続けたい、または新たにはじめたい運動・スポーツの有無については、「しない・みない・ささえない」では「ある」と回答した者は22.9%と2割程度にとどまっていた。また、今後の直接観戦したいスポーツの有無では、「しない・みない・ささえない」の30.9%が「ある」と回答しており、今後のスポーツボランティア実施意向では、「しない・みない・ささえない」の12.8%が「そう思う」と実施意向を示している。スポーツに関わっていない「しない・みない・ささえない」青少年が「する」「みる」「ささえる」への一歩を踏み出せる施策が急務といえる。



【図C-3】年齢別にみたスポーツ「しない・みない・ささえない」

注) 過去1年間に1回以上の運動・スポーツ実施、スポーツ観戦、スポーツボランティアのいずれの経験もない者

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

【表C-1】「する・みる・やさえる」タイプ別にみたスポーツに対する意識や意向

(%)

		タイプ				
		しない・みない・やさえない (n=188)	するのみ (n=862)	する・やさえる (n=98)	する・みる (n=500)	する・みる・やさえる (n=130)
運動不足を感じるか	とても感じる	32.4	20.2	11.2	12.8	11.5
	少しは感じる	50.5	35.3	33.7	33.2	30.8
	あまり感じない	13.8	31.6	31.6	32.8	23.1
	まったく感じない	3.2	13.0	23.5	21.2	34.6
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
今後スポーツボランティアをやってみたい、または続けたいと思うか	そう思う	12.8	32.7	69.4	44.6	79.2
	そう思わない	68.6	47.1	25.5	35.2	16.9
	わからない	18.6	20.2	5.1	20.2	3.8
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
今後直接観戦したいスポーツがあるか	ある	30.9	49.2	65.3	86.8	91.5
	ない	69.1	50.8	34.7	13.2	8.5
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

		タイプ				
		しない・みない・やさえない (n=187)	するのみ (n=861)	する・やさえる (n=98)	する・みる (n=499)	する・みる・やさえる (n=130)
運動・スポーツの好き嫌い	好き	8.0	49.1	64.3	68.9	81.5
	どちらかという好き	32.6	33.6	28.6	25.1	17.7
	どちらかという嫌い	42.2	12.9	6.1	5.0	0.8
	嫌い	17.1	4.4	1.0	1.0	0.0
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

		タイプ				
		しない・みない・やさえない (n=188)	するのみ (n=860)	する・やさえる (n=98)	する・みる (n=498)	する・みる・やさえる (n=129)
今後も続けたい、または新たに始めたい運動・スポーツの有無	ある	22.9	59.5	67.3	68.1	88.4
	ない	77.1	40.5	32.7	31.9	11.6
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注) タイプ: 過去1年間に1回以上の運動・スポーツ実施、スポーツ観戦、スポーツボランティアの経験の有無により分類
資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

C-4 スポーツボランティア実施状況と実施意向からみた「やさえる」スポーツの可能性

図C-4に、スポーツボランティアの実施状況と今後の実施意向について示した。今後もスポーツボランティアをやってみたい、または続けたいと思うかという問いに対して「非常にそう思う」「そう思う」を意向のある者、「あまりそう思わない」「そう思わない」を意向のない者、「わからない」を保留である者としてクロス分析し、6つにタイプ化した。

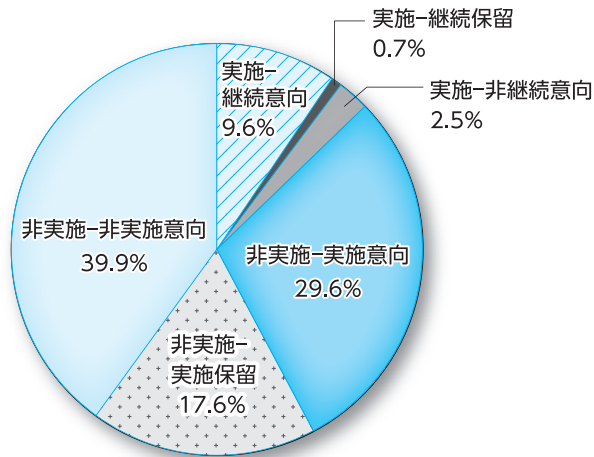
スポーツボランティアを実施し、今後の実施意向も有

する「実施—継続意向」は9.6%と約1割であり、スポーツボランティアを実施していないが、今後の活動意向を有する「非実施—実施意向」は29.6%と約3割である。つまり、約4割の者が今後スポーツボランティアを実施したいと考えており、それは必ずしも現在の実施者だけではなく、全体の約3割は現在実施していないが、今後は実施したいと考えている「潜在的スポーツボランティア層」と理解できる。

また、スポーツボランティア実施状況と今後の意向を年齢別にみると、潜在的なスポーツボランティア層である「非実施-実施意向」は、10~13歳において3割を超える(図C-5)。なかでも13歳では、「実施-継続意向」が13.5%と他の年齢に比べて高く、「非実施-実施意向」も合わせると48.4%となる。15~19歳では、「非実施-

実施意向」は25~30%と10~13歳より低い。「実施-実施意向」を加えると3~4割にのぼる。

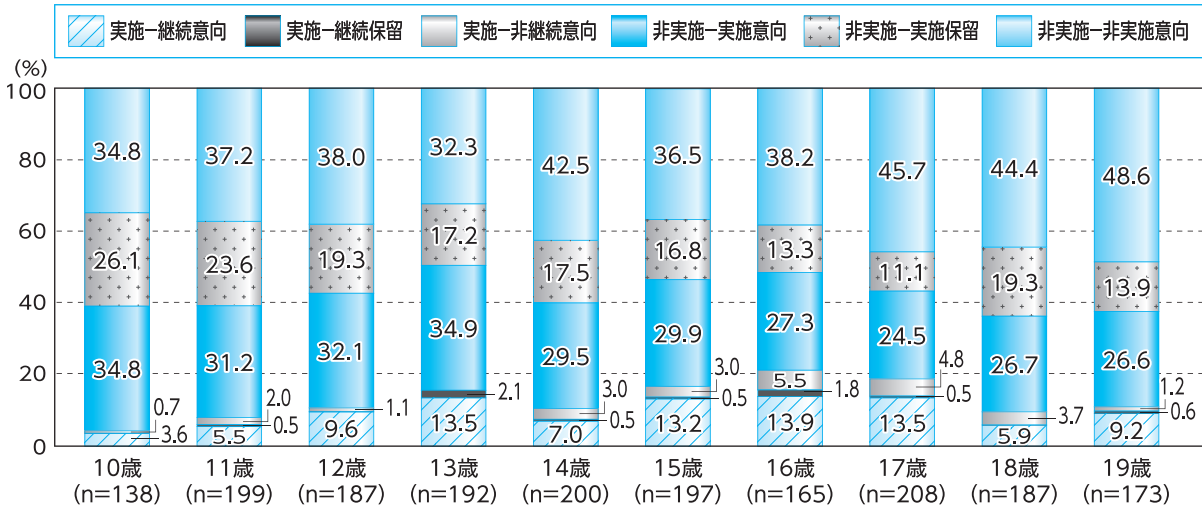
これらの結果から、わが国の10代はスポーツボランティアへの潜在的なニーズは高く、今後スポーツボランティアの実施を促す政策が求められる。



【図C-4】スポーツボランティア実施状況と今後の実施意向 (n=1,846)

- 注1) スポーツボランティアを実施し、今後の実施意向も有する者を「実施-継続意向」、今後の実施意向が不明である者を「実施-継続保留」、今後の実施意向のない者を「実施-非継続意向」とした。
- 注2) スポーツボランティアを実施していないが、今後の実施意向を有する者を「非実施-継続意向」、今後の実施意向が不明である者を「非実施-継続保留」、今後の実施意向のない者を「非実施-非継続意向」とした。

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013



【図C-5】スポーツボランティア実施状況と今後の実施意向 (年齢別)

- 注1) スポーツボランティアを実施し、今後の実施意向も有する者を「実施-継続意向」、今後の実施意向が不明である者を「実施-継続保留」、今後の実施意向のない者を「実施-非継続意向」とした。
- 注2) スポーツボランティアを実施していないが、今後の実施意向を有する者を「非実施-継続意向」、今後の実施意向が不明である者を「非実施-継続保留」、今後の実施意向のない者を「非実施-非継続意向」とした。

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

C-5

スポーツボランティアの継続-非継続意向からみた「ささえる」スポーツの課題

「ささえる」スポーツを推進するうえで、今後ボランティア実施者の継続意欲を高める取り組みが重要となる。そこで、スポーツボランティアを実施し、今後の実施意向も有する者を「実施-継続意向」、スポーツボランティアを実施したが、今後の実施意向はない者を「実施-非継続意向」として比較した。

スポーツボランティア実施時の楽しさについてみると、継続意向者においてスポーツボランティア実施時に「楽しかった」と回答する割合が高く、楽しい活動としての意識や経験が継続意向を引き出していると推察される(表C-2)。

活動内容をみると、「スポーツの指導や指導の手伝い」

「スポーツイベントの手伝い」は継続意向者で割合が高く、「スポーツの審判や審判の手伝い」では、非継続意向者で割合が高い。

スポーツボランティアによって得られた効果では、「人の役に立っていると感じた」「いろいろな人と出会えた」「スポーツに対する知識や技能を得られた」が継続意向者において高い割合であり、「特にない」は非継続意向者で高くなっている。

これらの結果から、スポーツボランティアの継続を促すためには、活動に対する満足度を高めるとともに、主体的にその活動に関わることのできるような場面の設定が重要なポイントであるといえる。

【表C-2】 スポーツボランティアの継続意向別にみた活動の楽しさ、活動内容、活動の効果

(%)

		実施-継続意向 (n=178)	実施-非継続意向 (n=47)
活動時の楽しさ	楽しかった	56.2	6.4
	どちらかという楽しかった	38.2	42.6
	どちらかという楽しくなかった	5.1	42.6
	楽しくなかった	0.6	8.5
	合計	100.0	100.0
		実施-継続意向 (n=178)	実施-非継続意向 (n=47)
活動内容	スポーツの指導や指導の手伝い	29.8	19.1
	スポーツの審判や審判の手伝い	41.0	53.2
	スポーツイベントの手伝い	44.4	34.0
活動の効果	人の役に立っていると感じた	57.9	26.1
	いろいろな人と出会えた	36.5	19.6
	スポーツに対する知識や技能を得られた	33.7	21.7
	特にない	2.2	23.9

注1) 実施-継続意向: スポーツボランティアを実施し、今後の実施意向も有する者。

注2) 実施-非継続意向: スポーツボランティアを実施したが、今後の実施意向はない者。

注3) 「活動内容」「活動の効果」については複数回答。

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013